

フィンガーボウルと李鴻章(3)

遊 佐 徹

第3章 李鴻章の「失態」

1、レオポルド2世の「思いやり」

前章において、幾編もの文章で紹介されていたビスマルクやビクトリア女王と李鴻章を登場人物とする「フィンガーボウルの話」の真偽、実像を李の世界周遊の記録のなかに確認しようとしていた私達は、図らずもその新しいバージョンをベルギー訪問記のなかに見出すことになった。

ベルギー王、レオポルド2世が主催する歓迎晩餐会において展開されたそれとは、次のような内容のものであった。

光緒二十二年五月二十九日(西暦1896年7月9日)……夕刻、ベルギー王が宮中にて宴を張り節相をもてなされた。使節団の随員、該国の大臣および令夫人、各国の公使、書記官の尽くが席に連なった。宴の幕が閉じられようとした時、節相はなんとタバコをふかし始めた。これは西洋諸国の晩餐会においては礼儀にもとる行為である。しかし、ベルギー王はこの貴賓の失態が衆目の的となることを欲されず、各種タバコをもって出席者すべてに勧め回されたのだった。この出来事を記し置いたのは、賢者の失態をあげつらう意からではなく、西洋人が節相を敬うこと至極なるさまを伝えんがためである¹。

西洋のフォーマルな宴席に招かれた異国の客人が、マナー、エチケットを弁えぬために失態を犯すものの、主人役は機転を利かせて恥をかくことを回避させたという基本構造を備えるこのエピソードは、フィンガーボウルこそ出てこないが、私達がよく知る道德教材としての「フィンガーボウルの話」にそっくりである。

さらには、エピソードの結末部、すなわち、レオポルド2世のこの「思いやり」溢れる振る舞いは実際には李鴻章への尊敬の念から生まれたものであったという解説は、第1章で取り上げた「李鴻章“誤りて”手洗い水を飲む(李鴻章“謬”飲手洗水)」に描かれた李のエlegantなフィンガーボウルの水の飲み方がかえってビスマルクの尊敬の念を惹き起こすことになったという優劣逆転の展開を思い出させもする。

結局、李鴻章を一方の主人公とする一連の「フィンガーボウルの話」は、このベルギーでのエピソードが下敷きとなって生まれ、伝えられてきたものと考えてよいのだろうか。

2、ベルギー版「フィンガーボウルの話」の真実

上掲のエピソードを掲載している資料である『節相壯遊日録』、『李傅相歴聘欧美記』は、前章で説明した通り、英字メディアを中心とする海外メディアによる報道、記録、論評を取材源にして生まれた李鴻章の世界周遊記であった。従って、本エピソードにもそれが基づいた記事、記録があったと考えるのが妥当であろう。ただし、当該部分については取材源が明記されておらず、さらには、『李傅相歴聘欧美記』を見ると記載形式がベルギー国王が歓迎の宴を張ったことへの割注になっており²、編者もそのエピソードには副次的な意味しか見出していなかったような印象を受ける。果たして、李鴻章は本当にベルギーを訪れた際に宮中晩餐会でタバコを吸ってしまったのだろうか。

実をいうと、そのことを確認するのはそれほど困難な作業ではない。現在、イギリスで発行された新聞に関しては、大英図書館所蔵資料を利用して、17世紀初頭から20世紀中葉に至る350年間に発行された1400タイトルを精選収録するGale社提供のオンラインデータベース——British Newspapers 1600—1950（日本名：近世近代イギリス新聞アーカイブ）および大英図書館がやはり所蔵の18世紀から1950年代までの新聞資料700タイトルをFindmypast社との協力によってデータベース化して提供するBritish Newspaper Archiveが提供されており（両者には重複するタイトルもあるが、その一方で補完関係も構成している）、イギリスの新聞に掲載された李鴻章の世界周遊に関する記事についてはほぼ完璧な検索、閲覧環境が整っている。そこで、それらを利用して調査を実施してみたところ上述の疑問に十分な答えを与えることができたのだ。

ブリュッセルの王宮で李鴻章歓迎晩餐会が開かれてから4日後の7月13日、リーズのタブロイド紙、ヨークシャー・イブニング・ポスト（Yorkshire Evening Post）は、李鴻章に関する以下のような記事を掲載した。

LI HUNG CHANG AS A LEADER OF FASION. An amusing incident occurred the royal dinner given in Brussels to Li Hung Chang on Thursday evening. After parsing into the State Drawing Room at the conclusion of dinner, the Chinese envoy, apparently in ignorance the rule of Court etiquette which strictly forbids smoking in the State apartments, pulled out a long pipe, which, duly filled and lighted by his secretary, was returned to the owner, who began drawing it with evident satisfaction to himself. King Leopold, with kindly tact, had cigarettes thereupon passed round, and in a few minutes the whole company were puffing vigorously.

流行の先導者としての李鴻章。ある愉快的な出来事が、木曜日の夜、李鴻章のためのロイヤルディナーの席で起こった。ディナーの終了の際に公式応接室へと移動したところ、かの

中国の欽差大臣はどうやら公式諸間においては喫煙を厳しく禁ずるという宮中礼式のルールに無知であったらしく、彼の秘書によって適切に葉が充填されたうで火をつけて持ち主に返された長いパイプを掴み取ると、全く満足そうにそれを吸い始めたのである。そのありさまに、ベルギー王、レオポルドが、思いやり溢れる機転を利かせ、その場でタバコを皆に勧め回すと、数分後には来賓一同も盛んに煙をくゆらし始めたのだった。

英文版では、タバコがパイプ(恐らく「キセル」だろう)となっていたり、随員のみめめしい世話振りが描かれているがそれを除けば、内容は中国語版とほぼ同一である。やはり、晩餐会での李鴻章の失態とレオポルド2世の「思いやり」は、英字メディアによって報じられていたのである。

しかも、同一の記事がその後19日に至るまで少なくとも6紙に転載され続けたことも調査によって判明した³。このエピソードは、当時多くのイギリス人によって共有されることになり、さらにはいずれかの掲載紙によって遠く中国にまで運ばれ、世界を巡りゆく天朝の欽差大臣の行状の一端として同胞の目にも触れることになったのである。

ところで、この李鴻章の世界周遊記に見出された「フィンガーボウルの話」の取材源である英文記事にはいくつか気になるところがある。

そのひとつは、エピソードの結末部の相違である。中国語版では、李鴻章はみずからの(そして彼を派遣した天朝の)威光によって、「思いやり」を施される対象から一転優位な立場を回復することに成功したことになるが、英文版にはそうした記述は見られない。つまり、中国語版の結末部分は、英文記事を利用した勝手な、あるいは意図的な解釈、補足で、まさに「賢者の失態」を糊塗するための同胞による「思いやり」であったということになるのである。

さらに気になるのは、エピソード本文に付された英文タイトルの意味である。「LI HUNG CHANG AS A LEADER OF FASION (流行の先導者としての李鴻章)」という見出しは、明らかに李鴻章の振る舞いを揶揄することに力点を置いたものである。つまり、読者の注意をレオポルド2世の「思いやり」に振り向けようという意図は希薄だった——つまり、いわゆる道徳訓話的な「フィンガーボウルの話」としてこのエピソードが読者に提供されたものではなかったと考えられるのである。

そもそもこの記事は、ヨークシャー・イブニング・ポストにおいては「本日のゴシップ」欄にいくつかの記事とともに掲載されたものであった。実は、これに続く記事も李鴻章の行状を伝えるもので、それは「HUNG'S ANCIENT EGGS(李鴻章の年季の入ったタマゴ)」というタイトル⁴のもと、李がこのたびの大旅行に際し、わざわざ3人のコックと燕の巣、金華ハム、ピータン等々の大量の珍味を帯同してきたというものであった⁵。この記事の存在も合わせて考えると、同紙が李鴻章の世界周遊を伝える際、その主眼を遠来の東洋の偉人の「奇行」を報じる点に置いていたことがいよいよ明らかになってくる。

地球の反対側、ブリュッセルの王宮で李鴻章が犯した「失態」とそれに対してレオポルド2世

が示した「思いやり」のエピソードは、形こそ「フィンガーボウルの話」の構造を備えているものの「フィンガーボウルの話」として喧伝された訳ではなかった（もちろん、話を受け取った側がどのように解釈したのかは別問題であるが）といえるだろう。とはいうものの、李鴻章の世界周遊記中に確認できる「フィンガーボウルの話」はこのエピソードのみである。また、新聞を中心とした英字メディアのデータベースを可能な限り調査してみたが西洋遊歴期間中において確認できる李にまつわる「フィンガーボウルの話」は上述の例に止まる。やはり、第1章で紹介した中国において伝えられている李鴻章が登場する複数の「フィンガーボウルの話」は、このベルギーでのエピソードを下敷きに「誤伝」もしくは「創作」された話であったと考えるべきなのだろうか。

3、タバコと李鴻章

ところで、レオポルド2世主催の歓迎晩餐会でタバコを吸ってしまった「事実」は、李鴻章を文明論的な劣等生の地位に追い遣ってしまうような出来事だったのであろうか。

確かに、手近にある西洋のマナーブックを紐解いてみると、フォーマルなディナーの席では喫煙が許されるとしても主人が食事の終了を告げる合図を待ってからとされており、その点で自分勝手に一服付いた彼の行為はすでにマナー違反以外の何者でもなかったし、パイプも洗練された喫煙具とは見なされていなかったことも判る⁶。さらには、記事にもあるように王宮の公式行事空間ではそもそも喫煙は許されていなかったのである。

しかし、当然のことながら、それは「文明古国、礼儀之邦」から欽差大臣として派遣された彼にとって何等意に介するべきものでなかったに違いない。

1901年11月の李鴻章の死後、いち早くその評伝を書いた梁啓超⁷の評によれば、常日頃「傲慢軽侮」の表情を浮かべて他者に臨む風のあった李鴻章は西洋人に対してそれを著しくしていたといい⁸、また、清代の掌故に精通した李岳瑞によれば、李は「外人」を決して「文明国人」として扱うことがなかったという⁹。その姿勢、判断基準をたとえ自分の方から西洋へ赴くことになったからといって彼が突然ベルギーで変えるはずもないであろう。

そのような李の気性をよく表わしているエピソード——それもタバコにまつわる——が彼の世界周遊を記録した資料のなかに残っている。それは、最初にして最重要の訪問先、ロシアでの彼の振る舞いとして書き留められている。記録者は、前章でも取り上げた、サンクトペテルブルグにおいてロシア側の責任者のひとりとして李と秘密交渉のテーブルを囲んだウィッテである。彼の回想録の1章が、李との交渉の過程に割かれていることは先に記した通りであるが、そのなかに以下のような李とタバコを巡るエピソードが載せられている。

李鴻章は、最初私を大蔵大臣の官邸に公式訪問した。私も直ちに答礼に行った。その後屢々彼と会見して露支両国間の相互関係について政治的交渉をした。この最初の会見をする前に支那の事情に通じた或る人が私に次のような注意をして呉れた。

「何事にも礼讓儀式を重んずる支那人に対しては、決して急いで決断を促してはならない。

それは彼等の間では不作法として最も嫌悪する所である。だから、何時も悠々迫らざる態度をもって彼等に対さねばならない。」

そこで李鴻章が訪問したときは、私は小礼服を着てこれを第一の客室に出迎えた。互いに健康を尋ね合って、出来るだけ低く頭をさげて叩頭し、それから第二の客室に請じて茶を出すことを命じた。私と李は相対して着席し、彼の随員や私の部下はいずれも直立していた。私は彼に煙草をすすめた。すると彼は仔馬の啼く様な奇声を発した。隣室から彼の随員中の二人が、一人は水煙草の器具を一人は煙草を捧げて彼の側に近寄った。そうして吸煙の儀式が始まった。李鴻章は悠然と椅子に座して煙を吞吐するのみである。煙草に火をつけること、烟管を李の口に挿入すること、また口から取り外すこと等は一切従者が最も郑重に且つ最も謹厳にこれをするのである。こんな大袈裟な真似をするのは、恐らく我々外国人を威圧する用意であったろうが、私は勿論何の気もつかぬ風をして平気を装っていた¹⁰。

まさに、国運、国益を賭けての交渉に臨んだ当事者による交渉相手の観察、描写だけに臨場感に富んだ李鴻章の喫煙シーンである。おそらく、ベルギーでも、これと同様の随員に恭しくかしくかれながら泰然自若たる態度で一服を楽しむシーンが繰り返されることになったのであろう。

その様子を文字通り目の当たりにしたウイッテは、李の態度を「外国人を威圧する用意」であると理解したが、それを一種のブラフと受け取った百戦錬磨の政治家、外交官の理解の当否はさて置き、李鴻章本人は、外国人が目の前にいようがいまいが、いつもの通り一服を楽しんでいただけなのであろう。

彼は、ロシアの次に訪れたドイツにおいてもささやかなものではあるがタバコにまつわるエピソードを残している。それは、ベルリンに到着し最高級の宿舎をあてがわれた彼を部屋で待ち受けていたもののなかに、お気に入りのシガレットがあった——もっとも、李は中国では外国製シガレットを決して吸うことがなかったという説もある¹¹が——というものである。このもてなしは、清との友好関係を重視したドイツ皇帝の配慮に出たものであった¹²。李鴻章のタバコ好きは夙にヨーロッパにも鳴り響いていたのである。

4、「不恥下問」——さらなる「失態」

以上見てきたいくつかのエピソードは、タバコや喫煙が、李鴻章にとっては少なくとも外国人との交渉時において自身のステータスを象徴するアイテムや行為であったことを教えてくれるだろう。

ベルギーでの歓迎晩餐会における李鴻章の喫煙は、出迎えた側にとっては「思いやり」をもって許容してあげるべき、そして「奇行」としてあげつらうべき(「非文明的」)行為であったが、一方の李本人にとっては、自身の威厳をあるいは高めさえすれどもいささかも傷付けるものとはならなかったのである。

そこで残るのは、故国や遠くから李の振る舞いを知るに及んだ同胞の受け止め方ということ

になろうが、彼の世界周遊を注視していた（それを可能とする条件が整っていたことについては前章で述べた）同時代人も、さらにその後の現在に至る歴史のなかで何らかの形でそれに触れてきた人々も、このベルギーでの出来事、エピソードそのものに対して反応を示した形跡は見当たらない。

だからこそ、李鴻章を主人公とする「フィンガーボウルの話」が生まれるうえでこの一件が直接、間接の呼び水になり得たのか否かが改めて大きな関心事になってくるのであるが、実は、同時代の同胞は、李が異国で犯した別の種類の「失態」には鋭く反応していたのである。

その代表者が、先に李の気性の一端を説明する際にその手になる李鴻章評伝を引用した梁啓超である。梁著の開巻早々に李とビスマルクの会見の様相が紹介されていることから明らかな通り、梁は李の世界周遊に強い関心を持ち、また周遊を伝える欧文の記事にも目を通していったようである¹³。

件の「失態」は、梁が、先の引用箇所と同一の章において、「不過偶所触及、拉雜記之（たまたま目に付いたものを取りとめもなく書き留めたに過ぎない）」と断ったうえで列挙したエピソード群のなかに見える。

李鴻章之在欧洲也、屢問人之年及其家産幾何。隨員或請曰、此西人所最忌也。宜勿爾。鴻章不恤。蓋其眼中直無歐人、一切玩之於股掌之上而已。最可笑者、嘗遊英国某大工廠、觀畢後、忽發一奇問、問於其工頭曰、君統領如許大之工場、一年所入幾何。工頭曰、薪水之外無他入。李徐指其鑽石指環曰、然則此鑽石從何來。歐人伝為奇談。

李鴻章がヨーロッパを歴訪していた時、出会った人に年齢や財産の額を問い質すということがしばしばあった。その様子にある随員が、これは西洋人が最も忌み嫌う行為ですので、お慎みくださいますように、と頼んだものの、李は一向に気に留める風もなかった。そもそも李の眼中には西洋人など入っておらず、彼等を手玉に取って弄んでいただけだったのである。そうした振る舞いのうち、とりわけ滑稽だったもの——ある日、李が、イギリスの某大工場を訪れ、見学が終了した時、突然奇問を發して工場長に「君はこんなに大きな工場を切り盛りしていて、いったい年収はどれほどになるのだ。」と質したところ、工場長の答えが「給料のほかに収入はございません。」であったので、李はおもむろに工場長のダイヤモンドのリングを指差して、「しからばそのダイヤモンドはいずこよりもたらされたのだ。」と問い詰めた、は西洋人によって奇談として語り伝えられることになった。

この相手の年齢や財産、収入について無遠慮に質問する振る舞い、梁が「可笑（笑うべき）」と蔑んだ行為については、李の世界周遊記のなかに元になった記述を見付け出すことができる。

中堂之來吾英、上而政府巨公、次而格物名師、旁及局廠督辦、無不傾襟款接、歡若平生。顧不恥下問之中堂、往往口若懸河、出人意表。每當主賓列坐之際、不顧人品之有貴賤、亦不明國俗之有宜忌、大率根究年歲、研訊祿糈、甚至連根帶葉、牽涉妻孥。英人固和氣一團、問無

不答、然頗似縁敬客之故、不得已而答之者。及退而自問本心、皆不免如孔子之晒子路也。日者、中堂与少婦晤談、直問芳齡幾許。少婦久注鳳目、始轉鶯喉、然仍不以告也。惟語之曰。天下只有一人、許其問儂此語。中堂問何人。曰、李中堂也。一日、又晤家財盈京兆之富紳、知其董理某大局事、問月得薪水若干、曰、不選一錢也。中堂即極口獎之。又見其身佩大金鋼鑽、問何處得此至宝、価値若干。蓋不知数京金資本之局廠、英人肯輕於付託、必其身擅威名、家擅巨富者也。乃獎其不受薪水之廉、豈非辱之已甚。

中堂の我がイギリスに来たるや、上は政府の枢要、次いで学界の權威、ひいては企業工場の経営者に及ぶまで、誠意を籠めてもてなし、旧交を温めるがごとく接しないものはなかった。一方、下問を恥じぬ中堂といえ、往々にして立て板に水の弁舌を振るい、彼等の意表を突く質問を繰り返したのだった。主客列座の場が設えられるたびに、中堂は列席者の身分の上下を顧みず、また他国の慣例にも疎いため、ほぼ決まって相手の年齢を確認し、収入を問い質すというありさまで、さらに質問はあらゆることに渡り、妻子のことにまで及ぶのだった。イギリス人はもとより和やかさを尊ぶため、質問への答えを拒むことはないのだが、実際には彼等は客人への配慮の点からひとえにやむを得ずそれに応じていたのである。だから退席後に改めてそのことを振り返った時、皆一様に孔子が子路を晒った(孔子が子路に治国の志を尋ねた際、子路は礼讓に拠るべきと述べながら、その言葉に礼讓が感じられなかったことを孔子が晒ったという『論語』先進篇に見られる故事のこと。「礼儀之邦」からの客人である李鴻章のエチケット違反に対する幻滅を表わす——ただし、その比喩を用いたのは英字記事を翻訳した中国人である)と同様の気分を味わうことになったのだった。過日には、中堂は若い女性と話す機会を持った時、いきなり年齢を尋ねたことがあった。その振る舞いに女性はしばしば中堂を見つめたのちようやく口を開いたが、その問いには答えずに次のように返した。「私にこのようなことを尋ねるのが許されるお方はこの世にただひとりしかおりません。」そこで中堂が、それは誰であるのかと尋ねたところ、女性は「李中堂、あなたです。」と答えたという。また、ある日のこと、莫大な資産を有する富豪と会談した際、配下の理事がある大工場の仕事を任されていることを知って、ひと月にどれほどの給料を得ているのか尋ねたところ、理事の答えが「一錢もいただいておりませぬ。」だったので、中堂は口を極めて褒め立てたうえで、さらに理事が大きなダイヤモンドを身に付けているのを目に留めて、いずこよりその至宝を手に入れたのか、値はいかほどかと問い続けたということもあった。それは、巨大資本を投資した工場を鷹揚に他人に任すには、必ずやそのひとが世に名声を鳴り響かせ、みずからも巨万の富を有しているという背景があるのだということの中堂が知らなかったためといえる。かの理事の無給の慎ましさを褒めた中堂の物言いは、彼を辱めること至極なる行為ではあるまいか¹⁴。

さらには、この梁の記述の直接の出典以外にも、周遊記には、李が西洋のエチケットに反する形で、女性の年齢を尋ね、男性には給料の額を問い質す行為をしばしば繰り返していたことが記録されている¹⁵。

周遊記を読み通すと、そうした李の行為が、疑問に思ったことがあるとその場で口に出して尋ねずには気が済まない彼の気質——周遊記の編者は、それを『論語』の一節を借りて「不恥下問(目下のものに問うことを恥じない)¹⁶」態度と述べて肯定的に解釈したが——に由来するものであったことが判るのだが、当時、「学識有るジャーナリストとしての政論活動¹⁷」をもって大きな影響力を有していた梁によって特記されたこのエチケット違反行為は、やがて外遊時や対外交渉時に中国人が犯してしまった/犯してはならない典型的な「失態」として人々に知れ渡ってゆくことになるのだった。

一例として以下に挙げるのは、1903年にガラス工場開設のためドイツへ視察に赴いた蔣煦という実業家が残した旅行記に付載された一種の西洋エチケット手引である「論西礼之宜忌」で、その一節に李の質問好きが反面教材として取り上げられている。

入国問禁、入郷問俗、入門問諱、古有明訓、此各処風俗之宜忌、不可不知也。有中俗以為宜、而西俗為忌、中俗為忌而西俗反以為宜者、由於習俗使然、未必實有一定不易之理、祇合乎各處風俗之時宜耳。今中俗之初見面者先問貴姓大名、一向好呵、尊庚幾何、而李文忠遊歷各國亦以此套語施之歐洲、故歐洲人稱李文忠為好杜由杜、或好何烏而特由即你好否或尊庚幾何皆傳以為笑柄。且無論何人必問其官階行業、每月進款若干、此等事皆西人所最忌、而李文忠所常問。蓋上等人品高俸厚、年少位高者、固樂於被問、若反此者、自覺赧顏乏味。故歐美人不輕易問年歲及每月進款幾何、而婦女尤忌……。

「国に入りては禁を問ひ、郷に入りては俗を問ひ、門に入りては諱を問う」とは、いにしえよりの教えなのだから各地の習慣の準則禁忌についても知悉して置かねばならない。我が国の習慣では当たり前でも西洋の習慣では避けるものがあり、我が国で禁忌とされることが西洋ではかえって良しとされる場合もある。これは、習慣というものの本質に由来する現象で、実際はそれには一定不易の原則がある訳ではなく、単に各地の風習のうち時宜に合ったものが守られているに過ぎないのだ。現在、我が国では初対面のひとに会った場合、まず姓名、ご機嫌、年齢を確認するのが当然のこととなっている。それで、李文忠が西洋各国を遊歴した折にもこの一くさりを口にし続けたのであるが、その結果、西洋各国のひとびとは李文忠のことをハウドゥーユードゥーとかハウオールドアーユーとか呼んで笑いの種としたのだった。おまけに、誰彼かまわず位階職業、月収金額を問い質すことは西洋人が最も忌避する行為であるのに李文中は常にそうした振る舞いに及んでいたのであった。それらの質問は、品格上等にして高収入、年少なれど地位高きもの達にとっては問われても心楽しいことであろうが、そうでないもの達にとっては答えるのも恥ずかしい無粋なものとなるのだ。ゆえに欧米人は、軽々しく他人に年齢や月収を問うことがなく、またそれは婦女子が最も嫌う行為となっているのである……¹⁸。

李鴻章の世界周遊を注視していた同時代の同胞は、彼がベルギーで犯した「失態」に対しては反応することがなかったけれども、別の種類の「失態」はこのように強い関心を寄せることに

なったのである。そしてさらに彼等が注目した李の政治的「失態」が存在したのであった。しかもそれは驚くべきことに「想像」、「仮構」されたありもしない「失態」だったのである。

注

1. 前章で述べたとおり、引用は、『節相壯遊日録』による。『李傅相歷聘歐美記』『比輶小志』もほぼ記述は同じであるが、以下のように「フィンガーボウルの話」に相当する部分が「聞」から始まる形で割注——引用では小字として表記した——になっている点が大きく異なる。
(光緒二十二年五月二十九日[1896年7月9日])是夕、比王宴中堂於宮中。中堂隨員、本国大臣命婦、各国欽使參隨均集聞中堂於宴罷之際吸烟卷、非歐西大宴之規則也。比王不欲顯彰貴客之失、即令取各種煙備餉諸賓。其敬之者、至矣。
2. 注1参照。
3. その掲載日と掲載紙は、以下の通りである。14日：Bristol Mercury and Daily Post、16日：Dundee Courier、18日：Tamworth Herald、Wrexham Advertiser、Leeds Times、Reynolds's Newspaper。
4. 李鴻章のスタンダードな英文表記は、Li Hung-Changであるが、当時は、時としてLI Hung、Hung等に略されて表記された。
5. その全文は、以下のようなものである。HUNG'S ANCIENT EGGS. Li Hung Chang carries with him three Celestial cooks and vast store of preserved dainties, such as birds' nests, beohe-de-mer, highly cured Che-Kiang hams, eggs of venerable antiquity, and Samshoo of finest brand. 李が帯同してきた諸珍味のうち、birds' nests, highly cured Che-Kiang hams, eggs of venerable antiquityの3点については本文に示したような品目名を充てることができるが、不明なものもある。
6. Elsie Burch Donald, (1981), *Debrett's etiquette and modern manners*, 10, Royal, Diplomatic and Formal Occasions, London, Debrett's Peerage Ltd.
Millicent Fenwick, (1948), *Vogue's book of etiquette*, 3, men's manners, New York, Simon and Schuster.
7. 1901年12月になった『李鴻章 一名中国四十年来大事記』がそれで、成書後直ちに新民叢報社から刊刻された。
8. 注8(いま、『欽冰室合集』版[上海中華書局、1936年、上海]による)第12章、結論に「李鴻章接人常帶傲慢輕侮之色。俯視一切、挪揄弄之。……李鴻章与外国人交涉、尤輕侮之、其意殆視之如一市僧、謂彼輩皆以利來、我亦持籌握算、惟利是視耳。崇拜西人之劣根性、鴻章所無也。」とある。
9. 李岳瑞『春冰室野乘』巻中「李合肥軼事其三」に「文忠鄙視外人之思想、始終未嘗少變、甲午以後、且益厲焉。其对外人、終不以文明國人待之。此老倔強之風力、今安得復睹其人哉。」とある。なお、『春冰室野乘』は、李岳瑞が、清代の掌故を宣統年間の立憲君主を主張する勢力の新聞『國風報』に随時掲載したものである。いま、山西古籍出版社の民国筆記小説大観第1輯版(山西古籍出版社、1996年、太原)がある。
10. 『ウイッテ伯回想記 日露戦争と露西亜革命(上)』(大竹博吉監修、原書房、1972年、東京)、第2章 李鴻章と東支鉄道利権交渉。なお、引用に当たっては、歴史的仮名遣いの部分を現代仮名遣いに改めたことをお断りして置く。
11. 民国初期に西太后はじめとする清朝貴顕のエピソード集を多数上梓した楊公道の『李鴻章軼事』(兩友軒、1919年、刊行地不明)には次のような記述がある。
方公之以煙獻外賓也、不用雪茄、不用紙煙、但用中国之黃煙、且用水煙筒。西人多不知吸之之法、往往呼吸不靈、其水向外而噴、公亦必再三教之吸云。
12. 『李傅相歷聘歐美記』『聘德記・德輶日記』に、「德廷以中堂之來、於中德交誼大有關係、故於歡迎之禮、務從其恭。特就該撤好司代備行館、不但餽牽豐腆、供張華美已也。先期預問諸漢、德二君、具知中堂之所嗜。故凡口之於味、目之於色、耳之於聲、莫不投其所好。甚至中堂常吸之雪茄煙、常聽之画眉鳥、亦復陳於几而懸於籠、則其餘概可想見矣。」とある。
13. その第1章、緒論に「李之歷聘歐洲也、至德、見前宰相比斯麥、叩之曰、為大臣者、欲為國家有所尽力、而滿廷意見、与己不合、羣掣其肘、於此而欲行厥志、其道何由。比斯麥應之曰、首在得君、得君既專、何事不可為。李鴻章曰、譬有人於此、其君無論何人之言皆聽之、居樞要侍近習者、常假威福、挾持大局、若處此者當如何之。比斯麥良久曰、苟為大臣、以至誠憂國、度未有不能格君心者、惟与婦人女子共事、則無如何矣。李默然云此語拋西報譯出。尋常華文所登於星輶日記者。因有所忌諱不敢録也。」とあって、李鴻章とビスマルクの間で交

わされた会話が載せられている。本来割注の形を取る小字部分は梁啓超の記録姿勢を述べた部分であるが、そこには「西報」つまり欧文新聞（おそらく英字新聞だろう）から直接訳出した箇所があり、それは従来の中国語化された李鴻章の世界周遊記には「忌諱」のため訳出されることのない箇所があったとの指摘がなされている。ちなみに、その箇所とは「惟与婦人女子共事、則無如何矣（ただ婦女子とともに事に当たる場合のみはいかんとし難い）」で、「婦人女子」が西太后を連想させることを「忌諱」したことは明らかであろう。

14. 『李傅相歴聘歐美記』「聘英記・英輶偉論」。
15. それぞれ、前者については、イギリス滞在中の8月14日、海底ケーブル会社の招待を受けてグリニッジを訪れた際の会話「至於候接各路電報之際、主賓必共傾談、乃中堂問語、頗有出英人意表者。如問督辦於此局有若干股分。他公司有何股分。今年幾歲。禮羅脫侯皆似無奈而答之者。又問君夫人芳齡幾何。侯曰、此實本爵所不能告人者、惟有請中堂自問拙荊耳。中堂覺其意、因解之曰、華人問女之年、甚合於理、故承其問者、必以実告也。侯益奇之、且笑曰、此本爵所未敢深信者也。——『李傅相歴聘歐美記』「聘英記・英輶載筆上」」を、後者に関しては、その2日後スコットランドを尋ねた際、船中で同行者となった鉄道会社の社長と間で交わした会話「同登小輪船……同舟有倫敦中境鐵路公司總辦在焉、中堂即就之以叩英路之原委、兼問其年歲祿俸、總辦一一答之。中堂稱為槃槃大才、贊嘆不絕於口、惟并未請其至中国耳。——『同上』「聘英記・英輶載筆下」」をその典型的な事例として挙げるができる。
16. 『論語』「公冶長」の「子貢問曰、孔文子何以謂之文也。子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。」に基づく。周遊記には、この言葉を用いて李鴻章の質問好きの性格を説明した場面が他にも数多く見られる。
17. 狭間直樹『梁啓超 東アジア文明史の転換』（岩波書店、2016年、東京）序章。
18. 東京都立中央図書館、実藤文庫所蔵の光緒三十一年序刊本による。また、注9で引いた『春冰室野乘』巻中「李合肥軼事其三」には、「法使施阿蘭狡甚、謂恭忠王亦苦之。公与相見、方談公事、驟然詢曰、爾今年幾何矣。外人最惡人詢問年齡、然懼於公威望、不能不答。公掀髯答曰、然則是与吾第幾孫同年耳。吾上年路出巴黎、曾与爾祖劇談數日、爾知之乎。施竟踴躍而去。自是氣焰少殺矣。」という駐清フランス公使、オーギュストに年齢を尋ねた李鴻章のエピソードが載るが、ここではそれによって高慢な相手の鼻をへし折ったことになっている。

補注：前章、第5節においては、李鴻章のビスマルク訪問を周遊記の記載に従って、1896年6月27日のことと紹介したが、今回実施した英字新聞の調査によってその日付は6月25日が正しいものであることが判明した。これは、ビスマルクが隠居の地として選んだ、そして、李鴻章がビスマルクに会うために訪れたフリードリヒスルー（Friedrichsruh）にあるビスマルク財団（Otto-von-Bismarck-Stiftung）に残る『フリードリヒスルーの李鴻章』という文書によっても確認できる。従来、李鴻章の年譜や伝記およびその世界周遊に触れた論考では、管見の及んだ限り、そのすべてに渡って李とビスマルクの会見日を6月27日としてきたが、これは、『節相壯遊日録』や『李傅相歴聘歐美記』が英字メディアに拠ってそのことを報じた際、記事の日付をそのまま会見日として記載してしまったことを（私も含めて）踏襲してしまった結果生じた誤りである。